

# 母子3人食費1日200円

## ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

⑬

### 第2部 親は... <1>

母子3人で暮らす約15年の2DKアパート。泣き続ける1歳と2歳の子どもたちに「うるさい、もったまっ」と思わず声が出る。家計を一人で支えなければならぬプレッシャーと先の不安。時折過去に受けた暴力がフラッシュバックした。子どもたちに手を上げてしまい、そうになる自分の腕を血が出るまでかみ、感情を抑えた。

「とにかく苦しかった。子どもたちのことがうっとうしかった。4年前、離婚して母子家庭となった当時の心情をアイ(30)はもう振り返る。

付き合っていた男性との間

## 妊娠中から夫暴力離婚



離婚後、目の前の生活に追われ、子どもたちに愛情を注げなかったというアイ。いまは毎日抱き締めている

に子どもができ、23歳で結婚。長女を出産した。夫の暴力が始まったのはウイグルを導き出したことだった。

人間関係をうまく扱えない夫は仕事が続かず、転職を繰り返した。そのストレスをぶつけるようにアイに暴言を吐き、体を殴るようになった。

妊娠8カ月のとき、口論中にキレて、アイのおなかを蹴ったことがある。暴力が続いた末、アイは十一指腫瘍痛で吐血し、早産しかけた。

長男の誕生を心待ちにしていた夫。子どもが生まれたらきつと愛すると言っていた。一時暴力はやんだが、やがて仕事に行かずに部屋から酒を飲むようになった。夜中、寝ているアイを起こして体を殴った

り、髪の手をつかんで頭をアパートの壁に穴が開くほど打ち付けた。アイは体中あざだらけで、夏でも長袖を着た。

殴られた後、まだ2歳の長女がおびえながら寄ってきて「大丈夫だよ」と抱きしめてくれた。こんなんでいいのかなと感じながら、「先々、子どもたちにも、経済的にもお父さんは必要。いつか変わってくれるはず」と耐え続けた。

ある日、長女の頭に凹形腫瘍と離婚を決めた。

一時保護施設に身を寄せ、正式に離婚後、母子3人で生活を始めた。

アイは当時、小学校で障がい児支援ヘルパーとして働いていた。非正規で時給780円。保険料などを引くと手取りは10万円そこそこ。夏休み期間中は給料がない。月2万円の児童手当、4万5千円の児童扶養手当が頼りだった。食費は1日200円と決めた。スーパーでは切り品を選んで買い、学校から給食の残りをもらってやりくりした。水道やガス代を節約するため、お風呂は必ず3人一緒に入り、5分ですませた。

子どもたちはよくウイグル性の肺炎やインフルエンザにかかった。仕事を休むわけにはいかず、ファミリーサポートセンターを利用したが1時間600円で、1日預けるとその日働いた分がほとんど消えた。

仕事を失えば家族は路頭に迷う。職場で認めてもらうために、人の嫌がる仕事を率先して引き受けた。「だから母子家庭は」と言われたくなくて、家をきれいに片付け、きちんと食事を作った。毎日がただ忙しく、目の前のことに追われていた。当時、子どもと一緒に遊んだ記憶がない。

(文中仮名)

「子どもの貧困取材班」

・高橋優子

平均的な手取り収入の半分以下の家庭で暮らす18歳未満

の子どもの割合が県内は29.9%と全国の1.8倍以上。特に、ひとり親世帯の貧困率は58.9%と際立つ。親の困窮がそのまま、子どもの困窮につながっている実態がある。親が直面している現状を追う。

31面に続く30面に関連

# 未来案じ「変わろう」

1面から続く

小学校で発達障がい児をサポートするヘルパーの仕事はやりがいがあったが、非正規で、賃金が安く、3年の契約期限があった。

子どもたちはほこれからもっと金が掛かるだろう。契約期限が迫ったころ、アイは今の生活を変えなくてはいけない」と考えた。子どもたちのために安定した仕事に就きたい、自分に何ができるかと考えたとき、小学校の先生になりたいと思った。

学校で働いていると、子どもの貧困がよく見えた。1週間、ずっと服装が同じ子。「おなかすいた」と言うので、「どうしたの?」と聞くと「昨日、食べてない」「給食しか食べるごはんがない」と答える子。愛情不足でかまってくれて、授業中に悪ふざけをしようとする。

アイ自身、貧困家庭で育った。両親はともに中卒。共働きで、土日もほとんど家にいなかった。母親はレストランのウェイトレスとスナック、二つの仕事を掛け持った。早朝から深夜まで働き詰めで、かまってくれなかった記憶はない。

ここにいるよ  
沖縄子どもの貧困

第2部 親は…  
(1)

おなかをすかせ、学習環境がないため勉強についていけない。学校で孤立する子どもたちの気持ちが理解できた。「自分の子どもたちも、何年後かにこうなっているかもしれない」。2人の子どもたちが、



2人の子どもの手をつなぐアイ。「子どもたちのために変わりたい」

## 目標に添う教職に寄り添う子

学校で出会った子どもたちと重なるって見えたとき、「変わろう」と思った。そして、「子どもに寄り添う仕事をしたい」という目標ができた。

アイはこの春、県内の短大を卒業し、小学校教諭2種免許を取得する。

小学校の先生になることを決意してから、働きながら3カ月間、猛勉強して短大に合格した。母子家庭の母親を対象にした無料の貸付制度を利用して、学費を捻出。両親に頼んで実家に身を寄せ、児童扶養手当などでやりくりし、2年間は学業に専念した。

これから、臨時教員として働きながら、通信制の大学で学び、さらに1種免許取得を目指すと決めた。

アイは今後、困難する子どもたち、そして親の支援活動に携わりたいたいと考えている。

「電気代などを払えなくて困っても、世間体を気にして声を上げられない親が多い。自己責任論が、親やその子どもたちを孤立させている」とアイは話す。「自分でなんとかするしかない」と思っていた。でもできず、苦んでいた。離婚後、日々

の生活に追われて疲れ切っていたころ、アイ自身、救いの手を求めながら孤立し、人を寄せつけなかった経験がある。

「親は自己肯定感を失っている。大人にも『大丈夫』と語りてくれる人が必要。親が変われば、子どもが変わる。私と同じ状況の人が一歩を踏み出す助けになりたい」(文中仮名)

(子どもの貧困)取材班・高崎園子 2次回から火く木曜日掲載

記事に関する意見、情報をお寄せください。ファクス:098(860)34403 メール:kotomo-thinker@okinawatimes.co.jp